

の窮屈な椅子に腰を痛くしながら旅行するのは厭だし、といつて上等車の運賃は拂へさうもないし、だけど樂に旅行したいし、と安易と經濟とのデレンマに苦悶する階級が代表的な乗客となつてゐる。ナイト・コーア會社が途中の乗換を無くし、晝間ぶつ飛ばしてお晝食は手前共の方で差上げますといふことにしてから俄然人氣を博するに至つたといはれてゐる。次に運轉手が全行程を擔當し、途中の交替のために乗客が放つたらかしになる様なことのなくなつた

ことも、人々の氣持を快くした點であるといふが、ナイト・コーアに依る旅行は通り一遍の運送事業といふ氣はしない、何だか知り合ひの人々に運轉して貰つて自動車旅行をしてゐる様だ、といふ大したお賞めに預つてゐるさうだから、多分本當だらう。多少センチに過ぎる様だが、約三晝間の長い旅行だから、何でもない様なことで大いに旅愁を慰め得る場合はあらうと思ふ。

## 飄々 旅日記

### 風來山人

人生萬事、風を捕ふるが如しとは、さる古き書にある一句であるが、まことに何物をか捕へんとして努力するも遂に何物をも捕へ得ざるが人生である。それ風は何處から吹き來つて何處に吹き去るか知り得ないものである、山人茲

に感じたる譯でもないが、飄々として生き動きつゝあるが故に殆んどあるが儘に行動するのである。敢て歩むべきの道筋を定めない。飄々乎たる生活には脈絡なく系統だつた處がなくとも何處にか一縷の糸が何處からか何處かへ引き

延ばされて居るから、あるが儘の旅日記は必らずしも片々断絶するのではなく一脈の糸が陽炎の如くに映するのである、夫れで今其一筋二筋を取り來つて消夏の一助にもと投稿するのである。

### 一、關ヶ原

一行は關ヶ原驛の東端踏切を越へ細流に架する腐朽した木橋をば、やつとのことで渡り、つま先上りの小坂を上りて停車した、下車すると鳥徑鬼路の山路をよちて上る、上りつくと、やゝ平なる處がある、此處は丸山の山腹で、俯瞰すれば關ヶ原の古戦場は一望指呼の裡に收めらるゝのである。

この關原驛を中心として見ると鐵路に沿ふて街道がある即ち東、垂井から西、江州彦根に至る、其街道をさしはさんで東南方に栗原山其前面に南宮山更に其西北に、街道近く桃配山がある、栗原山、南宮山、桃配山の南麓に沿ふて伊勢街道があつて上野で養老の西方を通過する伊勢よりの一路と合し牧田を經、鳥頭坂を越へて關原に入り中山道と合する。關原と桃配山との間には十九女池がある、此南方より来る伊勢街道の西方に松尾山があつて山中部落を中間に宮上がある、中山道と十字型に横切る關ヶ藤川は不破の關趾の西を南に流れ松尾山の麓を東方に平井川と合して伊勢街道に沿ふて東南に流れ揖斐川に合して居る、更に中山道と關原で分れて居る北國街道は西方に天満山を擁し其山腹には池寺池がある、其池の東方に筆尾山が聳へて今吾々の立つ丸山に連なつて居る、此が地理の大略であるが説明者の話によると、

慶長三年八月十八日（今より三百三十七年前）豊臣秀吉が薨去すると、かねて天下統一の野心を抱懐する徳川家康は快よく思はない會津の上杉景勝を討つべく決心して同五年六月十六日大阪城を發し江戸城に入つたが、江州佐和山城にあつた石田三成は豊臣家の爲め徳川家康を除かんとするの意圖があつたから好機逸すべからずと家康の大坂を出發するや檄を飛ばし家康の罪を鳴らして同志を集め、其

重なるものは大谷吉繼、増田長盛、長束正家を始め毛利輝元、同秀元、吉川廣家、宇喜多秀家、島津惟新、小早川秀

秋、小西行長、長曾我部盛親、安國寺惠瓊、脇坂安治等で

其軍兵は九萬餘、徳川の守備城伏見を陥れて三成は總勢を

三軍團に分ち東海、中山、北陸の三道から進んで大垣城に

入つたのは八月十一日であつた。家康は七月二十四日下野

の小山まで進軍しておつたが三成東征の報を聞いて全軍を

東海中山兩道から西進せしめて八月二十三日岐阜城（西軍

織田秀行）を陥れた、三成は西軍に令して關ヶ原に退き合

戦せんとして大雨を犯し夜中南宮山の南を迂廻して關原に

出て左の陣形を布いた。

毎尾山に石田三成、小池に島津義弘、北天滿山に小西行長、南天滿山に宇喜多秀家、宮上に大谷吉繼、松尾山に小早川秀秋、松尾山麓に脇坂安治、南宮山に毛利氏等二隊で大阪軍は關原の隘路に據つて徳川軍を阻止せんとした、之れが所謂天下分け目の關ヶ原戦争であつた。

家康は西軍關ヶ原に退陣したと聞くや直に諸將に命し、

西軍を追ふて關ヶ原に進出して九月十五日に左の陣形を備へた。

東軍左縦隊先鋒（福島正則）は松尾村、柴井（藤堂高虎）

同 右翼隊先鋒（黒田長政）は丸山、陣場野（田中吉政）

丸山陣場野の中間に加藤嘉明、細川忠興、織田有樂齋

東軍中堅（松平忠吉、井伊直政）は今日紡工場地

軍監（本多忠勝）は十九女池西

本營（徳川家康）は桃配山

であつたが拂曉濃霧咫尺を辨じ難きに乘じ東軍、井伊松平

の中堅軍と福島正則は先を競ひて西軍に挑戦し、東西兩軍

混然として交戦したが正午近くに及んで東軍の形勢不利に

傾き士氣愈衰へんとして家康心平なるを得ず、かねて反應

の意ある小早川秀秋、脇坂安治等に反逆行動に出てんこと

を促せども兩人依然靜觀を守つて動かず、家康大に窮して

終に銃手隊をして小早川、脇坂の二軍に突撃せしめたので

秀秋安治等意を決して反逆行動に出て大谷吉繼の軍を突

撃したが大谷克く防いだ、併し三面敵を受くるに及んで潰

走した爲に西軍全滅の端は茲に開かれ遂に三成は江州に島津は牧田村より多良時村方面に遁走した。關ヶ原戦争は戦はさる以前已に東軍の勝利に歸すべきを豫想されたが却つて一時勝は西軍にあるかと思はれた、然るに裏切者の爲めに全敗し其結果西軍敗戦の結果は悲惨であつた、乍去三成が斯くまで西軍の諸將を糾合し得たのは實譲するに足る、戦後の首實檢はかくかく、首級は塚を築きて葬つた事なども説明があつたので、そぞろに當時の戦況を偲ばしむるものがあつた。山を下りて北國街道に出て不破關趾を一見し二臺の自動車を江州に向つて走らした黄塵濛々後車は前車の行蹻を見失ふことも屢々であつた、砂利道の苦惱感は十二分に感ぜしめられたことだ。

## 二、伊吹の登山

江州彦根は蚊帳の產地で「蚊帳越し朝々うれし一枚は廂の下にそよぐ合歡木」と蚊帳に湧く興味を味ふべくもなく蚊帳にうとまれて樂々ならぬ一夜を明かして朝食をそこそ

こに終へ自動車に分乗して、途中キヤラメルや冰砂糖など買込み薬草の名所伊吹山をさして走ること時餘・琵琶湖東に聳へ立つ、その山麓に達した・山は海拔千三百七十七米（四千三百尺）の高さである「おほつかな伊吹おろしの風さきにあさつま舟のあひやしぬらん」との山家集の一歌を思ひ出した。山麓の一茶店で小憩、登山裝をとゝへ金剛杖を一本買ひ求め上着とカラーやをぬきて手拭を首にまきつけいざと計りに意氣込んだが丹波生が此姿を見て忽ち「のぼれるかな」との一言を發したので「勿論」と答はしたが白狀すると胸中秘策を藏して居つた、夫れは一行中の最年長者であると口許り強いので果して絶頂に達し得るや否萬一力盡ければ山腹で一行の下山を待ち合せば遅れば取らない程度の歩調で行くべし山頂は遁げねば一步づゝ近づくなり一行におくれたりとて心あせるべきにあらずと教へられた事がある登山の秘訣である。茶店の後に出て、仰ぎ見れば山形雄大で深山の觀なきも攀登の困難を感じられた。

往昔は此山餘程怖れられたと見へ藤原武智磨傳中に「土人曰入此山疾風雷雨雲霧晦暝群蜂飛蟻、昔倭武皇子調伏東國廉惡鬼神歸到此界仍卽登也登欲爲神所害變爲白鳥飛空而去也」とあるを思ひ出したのである。今も長瀬節で「伊吹山からたよりはないが冬の知らせに雪が降る」と唄はれておる、登りて一合に到ればスキー場がある、雪の深いのも之れで知られる、四合目まではやゝ平かであるが五合六合と登れば路は険しく六合目は鞠場と稱して山勢愈急となるから昔時は此處からは女人の登攀を禁ぜられたものだが今日は夏季に入ると男女學生毎日三千人以上の登山者があるとの事で時代がかわると高山も女人に征服せらるるものである、七合八合九合の間には手掛岩行道岩などあつて山徑益に登攀すれば面を接つかと疑はる、九合目の驚之曲と名づくる處は岩石累々として危惧の念胸に迫まる、一行中の猛者豹頭氏はさすがに飛燕の如く岩から岩へと走り行き谷間に残る雪をかき取るなどの藝當が演じつゝあつた、絶頂に達すれば殘雪小池の形となつておつて俄かに渴を覺ゆる

こと甚しい、登山馴れた一行の長は忽ち金剛杖を突き立て小穴を穿ち雪解水を掬ひ出して飲み「甘露々々」と叫ぶと衆皆之れに倣ふて飲むは飲むは腹のふくれを覺へた、山の絶頂は平坦四町許り疾風常に起り草木爲めに疎である、南方を見れば藏然として峭立し脚下に迂曲せる險路が見ゆる之れが乃ち東山道である、更らに尾洲の方面に眼を轉ずれば木曾長良揖斐の三大川は三筋の白帶を伸ばしたる如くで犬山や大垣はあるあたりかなと雲烟の裡に模索するものもあつた、北面すると連峯逶迤として越前に續き山は山に、峯は峯に、谷は谷に重疊幾層なるを算し難いのである、白峰雄大のものは立山か白山か見當つかず日本アルプスの連峯は雲に入りて明かでない、西方を俯瞰すると之はまた何と云ふ絶景であらうか、名湖琵琶は盆景の如く醒ヶ井養鱒場に靈仙山の溪水で孵化せられた鱒五百萬尾を放流するのも近き内だと田口場長から話されたが、こんな盆池でそだつだらうか、小山潭水宗匠あれば忽ち盆上美景を構作せらるゝならんなど思ひ浮べつゝ餘吾の小湖や賤ヶ岳、鹽津、

菅浦、大崎の湖北の絶景、竹生島から湖西に聳ゆる比良の山、比叡の峯や延暦寺・志賀の宮邸は坂本の近くにありと説明せられ、

唐崎の松はもののかわ三井寺の晩鐘も

さては粟津の晴嵐など近江八景は其

規模小さきに過ぐるなど音を笑ひ洗

堰の機能や姉川の所在など湖南の方

面其處彼處と鴻湖をめくる多景を賞

讃する内に彌勤の草に足を伸ばし、

用意の辨當をひらき満腹の躰を日光

にさらした（寫眞中の人物は紫外線

に浴しつゝ大氣を呼吸するもので決

して疲勞したものではないことを断

りおこ）絶頂にある氣流觀測所のこ

となど話し合ひ、日本武尊の石像前

で撮映した、夫れより急行下山した

が男や女のギボシを採取する光景も捨て難き趣がある。四

合目で薬草園などを一見し、二時間計りにて麓茶店に着し  
薬草湯に汗を流して再び自動車上

の人となつた。

都市計畫や道路網策等地圖上で  
プランを立てるから行詰るのぢや  
寧ろ高山の頂で設計するのが妙案  
だと誰やらがしゃべられたことを  
思ひ出して思はず失笑した。

### 江洲曰挽唄

○白の夢さよ、相手のよさよ。  
相手かはるな、いつまでも

○來いと言はれて、その行く  
夜さは。足の軽さや、嬉れし  
さや

○今宵今晚、今晚かぎり、  
これにこりすに明日の夜も

